

石川県立図書館所蔵小倉文庫の

海外神社史料について

山口 公一

一、小倉文庫について

二〇一二年十一月二〜三日まで、石川県金沢市を訪れた。目的は、石川県立図書館の小倉文庫所蔵の海外神社関係史料の調査収集である。文庫の主である小倉學は戦前、國學院大學文学部を出た後、神祇院で神社の考証や民俗文化の調査に従事した。敗戦後、金沢に帰郷した。一九四六年三月に石川県立金沢第二高女に着任、日本文学史を講義する一方で民俗の宝庫である能登を行脚し、教育と学究の二つの道歩んだ。一九六一年「神祇信仰の民俗学的研究」で文学博士号を取得し、国立石川高専開学にあたり、招聘され、助教授、教授、名誉教授を歴任した人物である。専門は民俗学、能登の郷土史である。多くの成果を残し、二〇〇三年五月に死去した。享年九

一才であった。小倉が残した書籍・史料は死後、遺族によって、金川県立図書館に寄贈され、小倉文庫が設けられた。

二、海外神社史料の概要

小倉文庫の中に、神社民俗誌研究の一環として集められた史料として、『神社畧誌等綴 九冲繩・樺太・台湾・朝鮮 其他ノ部』がまとめられている。公開となったのは、二〇一〇年三月二十六日付である。この綴をみていくと、①『官幣小社波上宮略記』（一九三八年四月、同社務所発行）、②『浮島神社（一に長壽神社俗に御伊勢様）御造営趣意書』（一九四一年十一月、奉賛会会長當間重剛）ほか、③『官幣大社樺太神社志要』（一九三六年八月、同社務所編）、④『台湾神社略誌』（一九四二年二月三版、同社務所編）、⑤『台南神社誌』（一九三五年十月、同社務所編）、⑥『官幣中社台南神社誌概要』（一九三五年十月、同社務所編）、⑦『朝鮮内神社調 附録 朝鮮神職会会則』（一九二九年七月、朝鮮神職会）、⑧『国幣小社大邱神社御由緒畧記』（一九三六年カ、同社務所編）、⑨『釜山府国幣小社龍頭山神社記要』（一九三八年カ、同社務所編）、⑩『京城神社由緒沿革記』（不明、

同社務所編)、⑪『国幣小社光州神社概要』(一九四一年カ、同社務所編)、⑫『国幣小社平壤神社略記』(一九三六年カ、同社務所編)、⑬『百済の旧都扶余古蹟名勝案内』(一九三七年二月、財団法人扶余古蹟保存会発行)、⑭『北京神社の御創建』(『海外神社資料第一輯』東亞民族文化協会、一九四〇年八月)の計十四の冊子から構成されている。どれも海外神社の沿革のアウトラインを知り得る基本的史料である。日本国内において、これだけの海外神社史料がまとまって存在することも稀であるが、海外神社を研究の対象とする者にとっては、おそらくこの小倉文庫の存在自体がまだ充分に知られていないと思われる。

三、海外神社史料―存在の謎―

『小倉學編著・論考・執筆・放送等略目録』(二〇〇二年四月現在)を調べてみても、小倉自身が海外神社研究を手がけた形跡はない。したがって、なぜ小倉がこうした海外神社資料を保持していたのかは不明である。石川に戻った戦後に収集したものとは推測しづらい。とすれば、おそらく一九三七年から四四年に至る間、内務省神政局、神祇院の考証課等に勤務し、その際に利用した

資料の類いではなかったのかと推察される。あるいは、同時期に直接海外神社を訪れる機会があったのかもしれない。一九三〇年代以降日本でも外地へのツーリズムが盛んとなっていた。しかしいづれも推測にすぎず、石川県立図書館の司書の方にも尋ねてみたが、よくわからないとのことであった。

ただ、結果として、小倉がまとまった形で、沖縄・樺太・台湾・朝鮮における神社の略記を保存していただおかげで、私は今日の海外神社研究の進展に寄与する基礎的な史料の所在にたどり着くことが出来たのである。